

法務省人権擁護局長賞
(金沢地方法務局長賞)

「心の手をつなごう」

羽咋市立羽咋中学校 2年

林 恵 太 (はやし けいた)

「ばあちゃん、年取ったなあ。」

学年が上がるにつれて、勉強に部活にと忙しくなり、気付けば、もう随分と長い間、ばあちゃんに会っていない気がした。

身長が伸びていく僕とは対照的に、どんどん腰が曲がって小さくなるばあちゃん。体力がついていく僕と、だんだん体の機能が衰えていくばあちゃん。数日前、久しぶりに会ったばあちゃんは、以前より更に小さく見えたような気がした。

僕のばあちゃんは、今年で八十歳になる。かれこれ六十年以上、織物工場で働き続け、どんなに辛い時も、優しさと強さを忘れず、常に人に対して愛情を注げる人である。

だからこそ、数年前から、ばあちゃんの右目と左耳が完全に機能していないと耳にした時、言葉にならないほど僕は衝撃を受けたのだ。

絵や写真を眺める時は、大きな虫めがねを使い、テレビを見るときは右耳だけ、専用のイヤホンをつける。人が話かけても聞こえないことが多い。しかし、相当不自由であるはずなのに、「そんなもん、仕方ないわいね。」と常に笑って言うばあちゃんだったから、僕自身もあまり気にかけていないのは事実だった。

そんな陽気で明るいばあちゃんであったが、僕はこの障害を持っているがために、一度だけばあちゃんが見せた動揺と悲しそうな表情をした顔を今でも忘れることが出来ない。それは去年のことだった。

僕の母は、週に一度、足も不自由になってきたばあちゃんを買い物に連れて行くために、ばあちゃんの家に向かう。その日は、たまたま僕も部活が休みだったので、久しぶりにばあちゃんに会える！と喜んでついて行った。

ゆっくりとスーパーの中を回り、「恵ちゃん、何か欲しいものあるか？」と笑顔で尋ねるばあちゃんであったが、辛そうな、もどかしそうな顔をしたのは会計をする時だった。進行方向の関係で、店員さんの勘定を読み上げる声や、レジ袋は必要かカードは持っているかと尋ねる声はばあちゃんには届かない。だんだんばあちゃんの後ろにはお客さんが並び、イライラし始め、店員さんも困ってる様子が、遠くから眺めていた僕にも理解出来た。

それくらい、ばあちゃんがレジに居た時間は長かった。

「もたもたして堪忍ね。」と ばあちゃんは店員さんにも、後ろに並んでいたお客さんにも謝ったが、どの人も業務的・機械的な反応しかなかったことが忘れられない。

ばあちゃんの悲しそうな顔・悔しそうな顔を見た時、僕は「もっと皆、ばあちゃんに優しくしろよ。」と腹が立ったと同時に、ばあちゃんに対して何の手も差し伸べることが出来なかった自分自身に腹が立った。ばあちゃんの表情に気付いていたのに、周りから困った目で見られている場に飛び込んでいく勇気がどうしても持てなかったのだ。

「聞こえない。」「見えない。」と、ばあちゃんが言うのを僕は聞いたことがない。一番辛いのはばあちゃん自身であるのに、何故かばあちゃんは、それをはね飛ばすかのように笑う。だからこそ僕は、笑顔の裏に見え隠れする苦しさに気付き、ばあちゃんに対して思いやりの手を差し出さなければならなかったのだと心から思った。

目や耳、足が不自由な人に付きそって歩くことを周りにはどんな風に見ているのかな？と周囲の目を気にするのではなく、今、自分自身の前にいる人を受け入れ、無意識に、進んで手を差し出せる人こそが、そのさり気ない優しさこそが、本当の優しさであり、思いやりの心であるのだ。

この世界には、想像もつかないほど多くの人々が存在している。同じ顔が一人とていないように、皆それぞれ価値観も違えば性格も言葉も違う。中には、自分一人で歩けない、話すことが出来ないといった悩みを抱える人もいるだろう。ばあちゃんのように、耳が聞こえない、目が見えない人もいるだろう。それを悲観的に捉えて、ふさぎ込んでいる人もいるだろう。少なからず、障害を抱えた人々は確かに存在するのだ。

これらの人々に対して「優しくしなさい」「手助けをしなさい」という言葉はよく耳にするが、実際にその場面に遭遇した時、自ら手を差し出せる人は何人いるのだろうか？僕のように周りの目を気にして何も出来ない人は何人いるだろうか？頭で理解するほど簡単なことはないかのように、実際に体を動かすほど難しいことはないように思う。

障害を持っていてもいなくても、今も昔も、僕にとってばあちゃんは何一つ変わらない。ばあちゃんが、もう悲しい顔をすることがないように、これからは、堂々とばあちゃんの隣で僕が伝えるね。

「ばあちゃん、お会計はいくらだよ。」って。